



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」

Ver.2-005 号

2018 年 5 月の同志社人



目 次

1. 内藤正典 大学院 グローバル・スタディーズ研究科教授 : 「世界の大学は今」
2. 佐藤 優 大学神学部客員教授、作家 : 「銀座とのつき合いの変遷」
3. 「斎王代」の同志社人
4. 第20回 同志社東京校友会「春の集い」2018 写真集

.....

1. 内藤正典 大学院 グローバル・スタディーズ研究科教授

京都新聞に「現代のことば」というコラム欄がある。そこに内藤先生がイスラム以外のお話しを投稿されておられたので、ご紹介する。

「世界の大学は今」

5月の連休に北京大学の招きで世界学長会議と北京フォーラムの合同会議に出席した。高等教育への熱意を肌で感じさせる大規模な催しであった。中国政府は国内の大学に対して、学科と大学本体の双方で一流の拠点を「双一流」*とランク付けしている。今回の会議もこの拠点大学形成のために世界の一流大学を招いた。ハーヴァード、ケンブリッジ、オックスフォードをはじめ錚々たる大学の学長や副学長が参加して大学の針路を語った。

.....

* (注) 「双一流」とは、ウィキペディア「世界一流大学・一流学科」に次のような記載が

あった。その一部を多田直彦が要約したので、ご参考まで。

「双一流」とは「世界一流大学・一流学科」の略称である。これは中華人民共和国が 2017 年に実施し始めた高等教育政策で、21 世紀中葉に高等教育強国を築き上げることを目標とする。世界一流大学建設の対象となるのは計 42 校、世界一流学科建設の対象となる大学は計 95 校、総合計 137 校。(そのリストも添えられている。)

.....

日頃、日本での大学改革の議論を聞いていると、産業界の役に立つことを教えろ、先端産業に貢献することを教えろという声大きい。だが、驚いたことに、どの大学の学長も先端領域に集中的に取り組むべきだとは言わない。大学の使命とは、世界から優秀な学生を集め、質の高い教育をおこない、卒業生には世界に羽ばたいてもらうことにあると異口同音に言う。

社会科学や人文科学の分野でフランス最高のレベルにある社会科学高等研究院の副学長は、現代のグローバリゼーションを批判的にとらえるにはグローバル・ヒストリーの研究が欠かせず、そのためにはどのような地域、どのような時代であるかを問わず、微細な地域研究を推進していくと発言した。その発言に深くうなずいていたのは、これも中国の名門、清華大学の学長だった。

そしてどの発表も、論旨は明快、メリハリが効いており、かつ英語は平明で外国人にも十分理解できる話し方をする。世界の一流大学では、学長というのは外交のトップであり、外部から資金を獲得するために、プロとしてのプレゼンテーション能力を求められていることがよくわかった。北京大学もすごいことをする。世界中から大学を集めて学長のスピーチコンテストを催したようなものである。

日本からも多くの大学が参加していたが、国立大学から聞こえてくるのは相も変わらず、いかに金がないかという話ばかりである。私も長いこと国立大学に籍を置いていたから財政状況が厳しいことならよく知っている。しかし、今の日本の大学は政権中枢の意向に振り回されている。昔は、産業界も大学を出てから若い人たちを自前で育てることに力を入れていた。最近は即戦力になる人材を大学で育てろという。どんな人を育てようか、学生の個性をどのように引き出して世界に送り出そうか。人ひとりを大切にしながら落ち着いて思考力を鍛えているのでは間に合わないようだ。

だがこのインスタントな教育では世界の大学と競うことはできない。さあ AI の時代だ、データサイエンスの時代だといっても、数学の理論的基礎なくして応用分野は育たない。歴史や言語文化の基層を学ばずにグローバルな市場戦略を立てることもできない。主催した北京大学では、哲学科や歴史学科が「双一流」学科に指定されているし、もちろん大学本体

も「双一流」である。参加したどの大学からも人文系軽視の風潮など感じられない。裾野が広くなければ高い山はできないことを世界の大学は知っているのである。

.....

2. 佐藤 優 1985 年大学院神学研究科卒業

作家 同志社大学神学部客員教授

佐藤優教授のお話は、神学論などがでてきたりして、いつも難しい。しかし、今日は気軽に読めるエッセーを『銀座百点』*の5月号で見つけたので、要約してご紹介します。



「銀座とのつき合いの変遷」

◆佐藤優さんは学生時代(1979~1985)、年に2~3回、必ず銀座を訪れたという。それは、キリスト教神学の専門書を入手するために銀座の教文館へ出かけたのである。買った書籍は日本語の神学書以外に英語やドイツ語の本もあり、それがリュックサックに20~30冊で10万円以上の買い物になった。それはバイトの時給が400円の頃である。

東京駅発23時30分の(岐阜県)大垣行き快速に乗り、大垣で乗り換えて京都に戻る。車内では、午前零時を回ると就寝のために減灯される。その中で、買ったばかりの神学書を読んだときの情景が58歳になった今でも昨日のこのように甦ってくる、と言う。

◆1985年3月に大学院を卒業し、4月から外務省に勤務。当時、外務省の昼休みは、12時半から3時まで。先輩に週に2~3回は、銀座のフレンチレストランや和食の割烹、中華レストランに連れていかれた。ランチメニューだが3000円を超える食事だ。食事代を支払おうとすると「借越なんだよ。研修生は給与が少ないんだから、俺が払う。君たちは後輩に返しな」と言われた。当時は、「外交官は羽振りがいいんだな」と思っていたが、今になって振り返ると、あれは新人外交官に対する研修だった。

外交官にとって情報収集は重要な仕事だ。1995年3月末に私は7年8カ月のモスクワで

の勤務を終えて帰国。国際情報局分析第一課に勤務。銀座で食事を取りながら仕事をする
ことがよくあり、しゃぶしゃぶ鍋を囲んでいたときに、重要な情報を教えてくれた記憶が
ある。情報戦に関して、銀座と赤坂は、私にとっての主戦場だったのだ。

◆鈴木宗男事件に連座して逮捕され、「小菅ヒルズ」（東京拘置所の通称）の独房に512泊
した。塀の外に出るのは、月一回、裁判のため護送車で東京地方裁判所に連行されるときだ
け。護送車が銀座を通るとき、遮光カーテンの隙間から、さまざまな店が見える。特にビヤ
ホールが見えたときに、自由になって生ビールを飲みたいと思った。

護送車から見えたあのビヤホールには、保釈になったあとは、毎月のように通っていた。
そこでビールを飲みながら、自由のありがたさを実感した。しかし、最近酒をあまり飲ま
なくなった。50歳を越えたころから、人生の残り時間が気になりだして、酒を飲んで騒ぐ
よりも、コーヒーを飲みながら、冷静な頭で議論することが多くなった。

◆銀座の喫茶店によく足を運ぶ過程で銀座との新しい出会いがあった。それは中古万年筆
の専門店で、古い万年筆を集めることが趣味に加わったからだ。ヴィンテージ万年筆と呼
ばれる高価なものだけでなく、戦前の大学生が使っていた普通の万年筆も集めている。こ
ういう商業ベースには乗りにくい中古万年筆の専門店があるのも、文化の街である銀座の
特徴だ。

◆最近、私の関心は、国際情勢やインテリジェンスから教育にシフトしている。
2016年からは同志社大学神学部の客員教授になり、後輩たちに組織神学（キリスト教の理
論）を教えている。2月、箱根にある私の仕事場で、6人の神学生が合宿した。そこで十六
世紀の宗教改革を神学的にさまざまな側面から研究した。

学生たちに「東京でどこが印象的か」と尋ねると、異口同音に「教文館のキリスト教書売
り場です」と答えた。インターネット書店で簡単に洋書を含め、神学書が買える時代になっ
ても、リアルな紙の本に触れてみることによって、単なる情報とは異なる知的刺激を受け
るのだ。私が神学生時代に銀座で触れた感動を、40年近くたって若い世代も共有するの
である。銀座という街で、われわれは共通の意識を育んでいく。

*『銀座百点』の創刊は1955年。今年で創刊62周年になり、「銀座の文化的タウン誌」と
も言われている。創刊号には、吉屋信子、久保田万太郎、源氏鶏太、森田たまと素晴らしい
人々が登場する。

『銀座百点』から生まれた書籍に向田邦子の『父の詫び状』がある。これは『銀座百点』
の1976年2月号～78年6月号に連載されたもので、後に同じタイトルで文藝春秋から単
行本化されたものである。

なお、創刊時から変わらないユニークな冊子のサイズ・判型は、当時、関西で人気だった小冊子『あまカラ』（1951年～1968年）を意識したものである。

.....

3. 「斎王代」の同志社人

京都三大祭りの一つ、葵（あおい）祭は5月15日に行われる。そのヒロインである斎王代（さいおうだい）を今年務めたのは、坂下志保さん。この春、同志社大学を卒業、ダイキン工業に就職している。実は母親も平成元年の斎王代を務めている。昨年の62代斎王代の富田紗代さんも同志社女子中高、同志社大学政策学部2年生でした。

ちなみに平成の斎王代で出身校が明記されている40代から63代までをチェックすると同志社出身者は10人もいた。しかし、出身校を書いてない人もあるとのこと。正しくはもっと多くなりそうだ。

.....

第20回 同志社東京校友会「春の集い」2018





「一碗からピースフルネスを」と世界に呼びかける 千玄堂さん



応援団による声援 (河合五朗先輩も参加)

来年度の港 章委員長を中心に決意を述べる



興奮とお土産を持って家路につく

